

どこにいても、学びは続けられる

人文学プログラム 竹本 亜衣

放送大学大学院に入学したのは、フィリピンの大学で日本語教員として働いていた頃でした。勤務先で教員の修士取得が推奨されていたことがきっかけでした。入学ありきだったため、何を研究すればいいか、そもそも研究とは何なのか悩みましたが、授業中に繰り返し観察されていた学習者の母音の混同に興味をもったことが、研究テーマを「セブアノ語を母語とする日本語学習者の日本語母音知覚」に決めた理由でした。先行研究では調査対象者が3名と少なく、より大規模な調査を行いたいという思いも後押しになりました。

入学の形式は、まず選科生からのスタートを選びました。2年での修了は難しいと感じ、先に科目履修で単位を取っておこうと考えました。選科生期間と全科生1年目で授業科目の単位はすべて取り終えていたため、2年目は研究とデータ分析、執筆に集中することができました。月に一度のゼミはオンラインで行われ、海外にいながら指導教員からの確かな助言をいただけたことも、放送大学ならではの強みでした。また、ハイブリッド形式の合同ゼミで対面交流できた経験は、その後の研究を進める大きな励みになりました。

最も苦労したのは、読み返すたびに前後関係の矛盾が見つかり、修正がエンドレスに続く執筆作業でした。全科生2年目は帰国して執筆に専念したものの、論文提出締め切り2か月前に家族の介護が始まり、住み慣れた地元を離れることになりました。見知らぬ土地での長期滞在という想定外の状況でも予定通りに修了できたのは、インターネット環境とパソコンさえあれば学びを継続できる放送大学の環境のおかげです。前倒しで進める習慣と、場所を問わない学修環境が、自分を最後まで支えてくれました。

修了後は、オンライン日本語教師として授業を続けながら、毎日一本論文を読むことを習慣にしています。今年中に学会発表を行い、学会誌への投稿も目指しています。修士課程での学びは、専門知識だけでなく、問いを立てる力、文献を批判的に読む力、計画を細分化して進める段取り力など、教育現場でもそれ以外の場面でも生きるスキルを与えてくれました。研究者と教育者の両方であり続けたいという気持ちは、修了前より強くなっています。

ゼミで出会った仲間は、仕事や家庭と両立しながら高い向上心を持って学ぶ人たちばかりでした。そのような環境に身を置けたこと自体が、大きなモチベーションになりました。選科生期間を含めた3年間は、惰性で過ごした大学時代よりずっと密度が高く、確実な積み重ねがあったと感じています。

入学を悩まれている方に伝えたいのは、「できない理由」より「どうすればできるか」を考えてみてほしいということです。少しでも興味があるなら、まず一步を踏み出してみてください。国内外を問わず、放送大学は本気で学びたい人を支えてくれる環境です。何年かかってもかまいません。挑戦したことへのリターンは、必ず大きく返ってきます。